

透析患者における ABI 検査と頸動脈超音波検査の検討

◎馬場 昭好¹⁾、菱田 泰子¹⁾、馬場 初音¹⁾、鈴木 千夏¹⁾
医療法人社団 石鎚会 田辺中央病院¹⁾

【はじめに】動脈硬化は様々な要因により進行する病態であり、透析患者は特に動脈硬化発症の高リスク群とされる。動脈硬化の検査として代表的なものに ABI 検査と頸動脈超音波検査があり、全身の動脈硬化を評価する検査として有用であるが、直接的には ABI 検査は下肢の動脈を、頸動脈超音波検査は頸動脈を評価している。今回我々は透析患者における ABI 検査と頸動脈超音波検査について検討をおこなったので報告する。

【対象と方法】当法人透析医療センターで平成 29 年 1 月から 12 月の一年間に ABI 検査と頸動脈超音波検査を実施した 121 名を対象とした。男性は 74 名、女性は 47 名、年齢は 41 歳から 98 歳（平均年齢 70.0 歳）であった。ABI 値より分類し、頸動脈超音波検査で計測した max IMT を評価した。ABI 値は左右のうち低値を採用し、頸動脈超音波検査の max IMT は左右の総頸動脈、球部、内頸動脈の中で最高値を採用した。ABI 検査と頸動脈超音波検査の検査間隔は 6 カ月以内を条件とし、年齢は ABI 検査時のもので統一した。

【結果】ABI 基準範囲群（0.91～1.40）は 80 名（男性 52 名、女性 28 名、平均年齢 68.9 歳）で、頸動脈超音波検査での max IMT の平均値は 2.03mm であった。また ABI 低下群（0.9 以下）は 41 名（男性 22 名、女性 19 名、平均年齢 72.0 歳）で、頸動脈超音波検査にて内頸動脈の完全閉塞が認められた 1 名を除く 40 名の max IMT の平均値は 3.02mm であった。今回 ABI 検査で 1.40 を超える症例はなかった。

【考察】ABI 低下群では ABI 基準範囲群と比較し頸動脈の max IMT はより高値であり、頸動脈においても動脈硬化による狭窄や閉塞の危険性が高いことが示唆された。一方で ABI 基準範囲群でも max IMT は高値を示しており、ABI が基準範囲内であっても動脈硬化は進行していることが示唆された。

【結語】透析患者では ABI 検査が基準範囲内であっても、動脈硬化は進行している可能性があり、頸動脈超音波検査などで詳細に評価を行うことが必要と考えられた。

田辺中央病院 臨床検査科 0774-63-1111